

新しい教育哲学

—存在からのアプローチ—

加藤 清



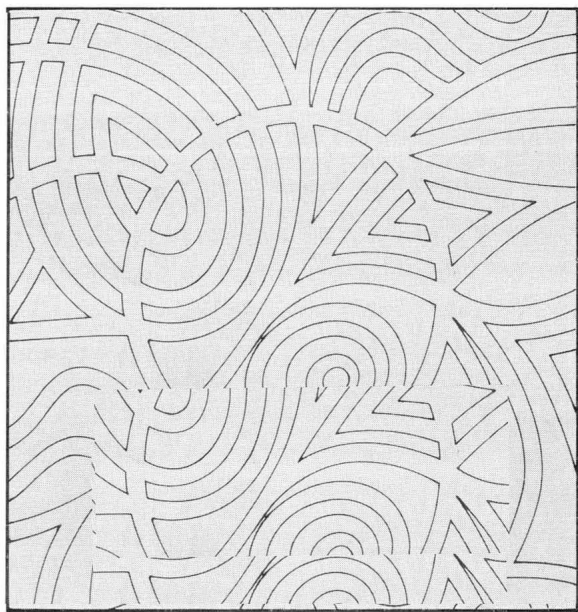
技術的思惟の必然的帰結としての
技術時代——存在忘却の技術時代
を超えるための新しい教育哲学へ

——勁草書房——

新しい教育哲学

—存在からのアプローチ—

加藤 清



勁草書房

序言

古くから教育は、常に、一つの時代への、調教同化の作用として発現するという側面をもっていた。そうして、それは、その時代に生きる人々にとって、確かに必要であり、有効な働きであることは否定できない。しかしながら、教育はまた、その時代のうちに没し切ることのできない、人間の本質を實現せしめるために、一つの時代を超えてゆく作用として、発現するという側面をもっていることも事実である。

本書は、ハイデッガーの思索に導かれながら、後者に該当する教育論を主張するものである。それを私は、人間に基づく、存在忘却の近代的教育論（第四章）を超え出るものとして、存在に基づく、存在教育論と呼ぶのである（第六章）。

存在教育論は、今日の時代を超え出る教育論であり、現代を克服する教育論であるが故に、存在教育論を展開するためには、先ず技術時代としての現代（第一章）が、見通されなければならず、更には、技術時代としての現代が、そこに由来する、近代の技術的思惟（第二章）の本質を、明らかにしなければならない。と同時に、技術的思惟に伴う、存在忘却の諸相（第三章）を説明することが必要となる。ここにおいて、技術的思惟の必然的帰結としての技術時代が、存在忘却の時代であることが明らかにするのである。かかる存在忘却の技術時代を克服するためには、技術的思惟を超えて、存在そのもの

のを現わす思惟が、求められなければならない。それが、存在の思惟（第五章）なのである。技術から存在へと超え出することは、単に、技術からの隔絶を意味するのではない。技術的思惟が、したがって、技術が、そこに基づき、その内で展開しているところの、根源としての存在へと立ち帰ることである。それが、技術時代を克服するということの意味なのである。単に、技術に隸属し、一方的に迷動する技術的人間を超えて、技術的人間自体が、そこに基づき、そこへとさしかけられている、存在へと還帰し、存在忘却の技術時代を克服する人間、それが、実存にはかならなかった。したがって、存在教育論は、必然的に、実存への教育（第五章第四節）を主張することになるのである。

この故に、この書は、技術時代としての現代を克服し、超え出てゆく、新しい教育について、思惟を試みるものであるが故に、『新しい教育哲学』なのである。

尚、この書は、拙著、『ハイデッガーにおける技術の問題』を土台として使用しているので、重複する箇所があることを御了承願いたい。

凡 例

一、参考文献の引用については、本文中の引用箇所には数字を付し、各節毎にまとめて示すことにした。

二、特にハイデッガーの著作からの引用は、次に示すような略符号を用いて、その頁数を示すことにした。

SZ Sein und Zeit, 1927 (1967).

UH Über den Humanismus, 1949.

HW Holzwege, 1950 (1963).

WM Was ist Metaphysik?, 1929 (1951).

VG Vom Wesen des Grundes, 1929 (1949).

VA Vorträge und Aufsätze, 1954.

TK Die Technik und die Kehre, 1962.

SG Der Satz vom Grund, 1957.

EM Einführung in die Metaphysik, 1953 (1966).

GL Gelassenheit, 1959.

EH Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung, 1951 (1963).

ID Identität und Differenz, 1957.

WB Vom Wesen und Begriff der *phōros*, 1958.

HH Hebel—der Hausfreund, 1957 (1965).

- DF Der Feldweg, 1953 (1962).
KM Kant und das Problem der Metaphysik, 1929 (1965).
US Unterwegs zur Sprache, 1959.
WD Was heisst Denken?, 1954 (1961).

目次

序言	i
第一章 技術的世界	1
第一節 テクネー	1
第二節 用立組	4
第三節 おびき出す顕現	9
第四節 技術化と人間	13
第五節 教育の技術化	19
第二章 技術的思惟	25
第一節 主体に基づく対象化	25
第二節 主体に基づく計算的確定化	30

目 次

第三節 主体に基づく用在化	37
第三章 存在忘却	49
第一節 存在忘却の真相	49
第二節 存在忘却の一般 ^と 人	59
第三節 存在忘却の科学	66
第四節 存在忘却の人間学	72
第四章 近代的教育論	79
第一節 デューイの教育科学	79
第二節 ボルノーの教育人間学	97
第五章 存在の思惟	111
第一節 現存在	111
第二節 基礎存在論的思惟	118
第三節 思惟の本質	128
第四節 思惟と言葉	142

第六章	存在教育論	157
第一節	非本来的な現存在	157
第二節	存在を受け応えること	166
第三節	実存すること	175
第四節	実存への教育	186
1	単独な実存への教育	186
2	実存的な交わりへの教育	195
3	世界の内に住まう実存への教育	201
あとがき		217

第一章 技術的世界

第一節 テクネー

技術 (Technik) という言葉は、ギリシア語のテクネー (τέχνη) に由来するが、かつては技術だけがテクネーという名をもっていたのではなかった。真理を輝ける光のなかへ現出せしめる顕現 (Entbergen・脱蔽) も、テクネーと呼ばれていた。真実を美のなかへ現出せしめることもまた、テクネーと呼ばれていたのである(1)。ギリシアにおいてテクネーは、顕に――前に――もたらすこと (Her-
bringen) であり、それは同時にポイエーシス (ποίησις) を意味していたのである(2)。それはただ職人的な仕上りだけでもなく、芸術的にうたい出しつつ、輝きと明らかな像に持ち来たらすことでもない。ピュシス (φύσις・自然) すなわち、それ自身から――顕に――現われ出ること (das von-sich-her-Aufgehen) もまた、一つの顕にもたらすことであった(3)。顕に前にもたらすということは、
蔽われていること (Verborgenheit・隠蔽性) から、蔽われていないこと (Unverborgenheit・非
隠蔽性) へと連れ出すことである。すなわち、われわれが顕現と名づけている事柄である。ギリシア

人は、そのかわりにアレーティア (*ἀλήθεια*・真理・蔽われざる真性) という言葉をもっている。ローマ人は、それを *veritas* (真理) と訳している。われわれは、それを真理 (*Wahrheit*) といっているが、ふだんはその言葉を、表象の正当性 (*Richtigkeit*) と解している(4)。ギリシア人にとってテクネーは、顕に前にもたらすことであり、顕現、すなわち、アレーティアにはかならなかった。ギリシア人にとって技術は、顕現の一つの仕方であり、蔽われていないことが生起する領域、すなわち、アレーティア (真理) が生起する領域のうちに存するのである(5)。

ギリシア人にとって技術は、真理が生起する領域に存するのであった。したがって、技術は単なる手段ではない。この故に、技術を手段であると共に、人間の行為であるとみなす一般の通念、すなわち、技術の道具的・人間学的規定は、われわれを技術の本質に到る道を閉ざしてしまうのである。もとより、この規定の正当さは誰も否認できないであろう。発電所も、ジェット機も、高周波機械も、人間によって定められた目的のために、人間によって作られた手段である。近代技術といえども、諸目的への手段であるということは、なんら正当さを失うものではないだろう。だから、技術についての道具的観念は、人間を技術への正しい連関にもたらそうとする、あらゆる努力を規定しているのもある(6)。しかし、正当であるということは、必ずしも当面の事柄を、その本質において顕にするとは限らない。本質の顕現が生起するところのみ、真なるものが現われ起ころのである。技術の道具的定義は、いまだ技術の本質を示しているものではない。それ故に、われわれは技術の本質に到達するために、正当なものを通じて、真なるものを探らねばならない(7)。技術は単なる手段ではなく、顕現

の一つの仕方であり、技術の本質は顯現、すなわち、真理の生起する領域に存するのであった。この故に、技術を単に手段として精神的に手中に収め、適切に使用し、支配しようとしても、それは人間の支配から滑り落ちることになるだろう(8)。技術の道具的觀念にのみ熟中することは、われわれを完全に技術の本質に対して盲目にさせ、技術の本質への關係を経験するには到らない。その限り、いかに技術を熱烈に肯定しようが、否定しようが、所詮自由でなく、技術に縛りつけられたままにいることになる。したがって、技術に対して自由な關係を持つとうとするならば、現存在の窓を技術の本質へと開くのでなければならぬ。その時にわれわれは、技術的な事柄の限界を知ることができるのである(9)。しかし、かような技術の本質領域の規定は、果して近代技術について妥当するであろうか。

- (1) TK, S. 34.
- (2) TK, S. 12.
- (3) TK, S. 11.
- (4) TK, S. 11~12.
- (5) TK, S. 12~13.
- (6) TK, S. 6.
- (7) TK, S. 7.
- (8) TK, S. 7.
- (9) TK, S. 5.

第二節 用立組

近代技術もまた顕現である。しかし、近代技術を統べている顕現は、自然に向って、エネルギーを供給すべき要求を押し立てるおびき出しである。すなわち、近代技術を統べている顕現は、おびき出す顕現 (das herausfordernde Entbergen) なのである⁽¹⁾。ここでは、一切のものを用立て (Bestellen) の仕方をもった顕現のうちへと導き、それ以外の顕現の可能性はなくなってしまう。のみならず、人間自身が、単に用在 (Bestand) の用立人 (Besteller) として、おびき出しの連鎖のうちに立っているのである⁽²⁾。技術時代の人間が、特に甚しい仕方で顕現へとおびき出されていることは、蔽うべからざる事実である。ちょうど、山脈 (Gebirg) が、山々を根源的にまとめるものであり、心情 (Gemuth) が、いろんな心持を、そこから展開させ、根源的にまとめているものであるのと同じように、人間自身がおびき出しの顕現へと駆り立てられ、まとめられているのである。かように自己顕現するもの (Sichentbergendes) を、用在として用立てるように、人間を統べまとめてゆく、そのおびき出し的な呼び求め (Anspruch・要求) を用立組 (Ge-stell) と称するのである⁽³⁾。かかる用立組こそが、近代技術の本質なのである。

近代技術の本質は、用立組であるが、用立組のまとめは、存在のさしむけ (Geschick) に属する⁽⁴⁾と言われている。およそ在るといわれるべき事柄の隠れなさは、常に顕現の道を歩む⁽⁵⁾。そうして

顯現は存在のさしむけである。さしむけが人間を、そのつど顯現の途に就かせるのである(6)。だから、用立組のまとは、存在のさしむけに属しているのであり、さしむけが、用立組を顯現の在り方の一つへとさしむけるのである(7)。したがって、さしむけが用立組の在り方を統べているのである(8)といふことができる。しかし、用立組は、おびき出す顯現へと人間をまとめてゆくものであり、呼び求めやさしむけとは、無関係なもののようにも考えられる。けれども、一見その父祖と同じように、森の道を見巡っている森番は、今日では、彼がそれを知ろうと知るまいと、木材加工産業によって用立てられているのである。彼は、纖維素を用立てるように用立てられ、纖維素は、新聞や読み物に当てがわれる、紙の需要によって徴発され、その新聞や読み物は、世論を駆り立てるといふ具合である。現実を用立てる顯現が生起しうるのは、人間自身が現実を用立てるように、用立てることの中へとおびき出されているからである。とすれば、人間こそ、自然よりも更に根源的に用在に属していると考えられる。人間資源とか、病院の臨床例という今日の流行語がこのことに与しているであろう。かように技術時代の人間が、現実を用立てるようにおびき出されていることは、蔽うべからざる真相である(9)。かように、用立組の支配は、存在のさしむけに属しているのであり、さしむけが、人間をそのつど顯現の途に就かせるのであった。人間が顯現の途を歩むとき、このさしむけは、常に人間を隅から隅まで統べているものである(10)と言われている。

近代技術の本質は用立組にあり、用立組の支配は、存在のさしむけに属することが明らかになった。それでは、さしむけに属するところの本質そのものは、いかなる意味における本質であるのだろうか。

本質という語は、普通或るものが何であるか¹²ということを、すなわちラテン語の *quid* を意味している。例えば、木のあらゆる種類に適當しているものは、同じ樹木的なものとしての一般的な類、すなわち普遍的なものであり、そのうちに現実の木々も、可能の木々もはいつているのである。しかし、用立組はこれと同じように、あらゆる技術的なものの共通の類ではない。機械や器具や技師は、用立つものの部品、用立つもの、用立人として、それぞれの仕方で用立組に属してはいるが、決して用立組のある種類ではない¹¹。したがって、用立組は、類並びに本質 (*essentia*) の意味における本質ではないのである¹²。用立組が、近代技術の本質であるという場合の本質とは、どうゆう意味の本質であったのか。われわれが、家や国の本質、すなわち世帯 (*Hauswesen*) とか国体 (*Staatswesen*) とかいう場合には、家や国の類という一般者ではなく、それらがいかに支配され、管理され、発展衰微するかという在り方、すなわち、家や国が、いかに存している (*wesen*) かという在り方を意味する。更にいえば、いかに活動を続けているか、すなわち、いかに存続している (*währen*) かという在り方を意味している。したがって、*Wesen* (本質) という名詞は、*wesen* (存する) という動詞から派生したものであり、動詞的に理解すれば、*währen* (存続する) と同一なのである。すでにソクラテスやプラトンも、或るものの本質を、存続するもの (*Währendes*) という意味で存するもの (*We-sendes*) として思惟している¹³。つまり、或るものがいかに存しているかという、或るものの存在がそのものの本質なのである。したがって、真に技術のうちに存するもの、すなわち、技術の存在がその本質なのである。それでは、真に技術に存するものとは何であるのか。それは、本来的に存続してい

るものが何であるかを省察することである。ところで、存続する(wärhen)と¹⁾もたらす(gewähren)とは、かつては同じ響きのうちに聴きとっていた(ゲーテ『親和力』第二部、第十章)といわれる。本来的に存続するものは、もたらされたものなのである。もたらされたものだけが、真に存続するのである。したがって、技術に存するもの、存続するもの、すなわち、技術の存在はもたらされたもの、さしむけられたものなのである。それが近代技術の本質であり、それが用立組なのであった。この故に、用立組が技術のうちに存するもの、すなわち存続しているものであるということは、用立組がもたらされたものという意味において、統べているということである(14)。先に述べた、さしむけに属する用立組は、かように、もたらされたものとして支配しているのであり、この故にさしむけは、もたらしと呼ぶべきである。いかなる顕現のさしむけも、もたらしとして生起するのである(15)。かように、近代技術の本質すなわち、存在とは、もたらされたものであり、そこで統べまとめられて、近代技術の活動が続けられているのである。それが近代技術の本質であり、それが用立組であった。したがって、それは、なんら人間の作りものではなく、人間の如何ともすることのできないものであった。近代技術は、単なる人間の行為ではなく、また、人間的行為内における単なる手段ではない。この故に、技術の道具的な規定や、人間学的な規定は、原理的に脱落せざるを得ないわけである。用立組のうちに隠れなさ、すなわち、真理が生起するのであり、もたらされたものとして、技術のうちに存するものが、人間を、人間自身では発明することも、製作することもできないもののうちへ導入せしめるのである。さしむけによって、はじめて人間は、顕現の生起に必要なものとして、真理の生起と一体化

されるのである(5)といわれている。

- (1) TK, S. 30.
- (2) TK, S. 26~27.
- (3) TK, S. 19.
- (4) TK, S. 25.
- (5) TK, S. 24.
- (6) TK, S. 25.
- (7) TK, S. 24.
- (8) TK, S. 26.
- (9) TK, S. 17.
- (10) TK, S. 24.
- (11) TK, S. 29.
- (12) TK, S. 30.
- (13) TK, S. 30~31.
- (14) TK, S. 31.
- (15) TK, S. 32.
- (16) TK, S. 31.